

## はじめに

濁川孝志

先の大戦の終結からその後続く東西冷戦構造も崩壊し、世界はいよいよ調和の方向へ向かうのではないかと、いう多くの人々の期待もあったのですが、現実には目を向けると今世紀に入り世界はいよいよ混沌と化し、むしろ混沌を深めているようにさえ思えます。近年、世界のグローバル化は急速に加速し、色々な意味で国を隔てる垣根は低くなつたのですが、同時に世界の富は一極に集中し、人口の1%が世界中の富の半分を握るといふびつな社会格差を生み出しました。アメリカには世界調和よりも自国経済の優先を公然と掲げるトランプ大統領が生まれ、中国は力任せに無法な国際進出を図り、EUはイギリスの離脱でその結束にきしみを見せ始め、さらには核武装を本当に解除するのか疑わしい独裁国家北朝鮮の存在など、世界の政治、軍事、経済は微妙なバランスの綱渡りを余儀なく

される状況です。その他にも深刻な難民の存在と移民問題、絶え間のない国際紛争とテロの恐怖、構造的な貧困問題、気候変動をはじめとする地球環境問題など、今、世界は多難な課題が山積する状況です。

一方日本はと言うと、世界の中では比較的平和で豊かな国のようにも見えますが、事態はそれほど樂觀できるものではなく、ざっと考えただけでも以下のような深刻な問題が横たわっています。

- ・ 超高齢社会における少子化の問題、労働力不足の問題。
- ・ 青少年犯罪の凶悪化、親殺し、子殺しなどに象徴される著しい道徳観欠如の問題。
- ・ 全てアメリカの言いなりにしか行動できない日本政府の、というより日本国が持つ国体の構造的課題。
- ・ 誰のためか分からないような国民疎外の政治や、政官癒着の問題。
- ・ あれだけ悲惨な事故を経験しても、なお迷走する原発問題。
- ・ その他にも、あまり注目はされていないですが水源の問題、食の安全の問題、気候変動や自然災害の問題など。

そして何よりも、もうそこまで来ているAI時代、すなわち人工知能が人間に取って代わるというSF映画のような時代を、人々はどのようなスタンスで生きて行けばよいのか、そこがまったく見通せません。これらの問題の他にもう一つ、基本的な事実として日本人の人間性が疲弊、劣化しているような気がしてなりません。精緻を極める匠の業と、矜持をもった誠実な物作りが生み出した「Made in Japan」。それはかつて、世界に通用する品質保証の代名詞だったはずです。しかし、ここに来て次々と明るみになる日本を代表するような世界的大企業でのデータ改ざんなど不正の数々。これは、いったいどうした事でしょう。古来日本人が有していた世界にも稀にみる感性、すなわち調和を重んじる心や他人を思いやる価値観、年長者を敬う道徳観や生活に根差していた自然との一体感……そのような日本人らしさが少しずつ薄れてきているように思えるのです。日本はこのままで大丈夫なのだろうか。日本人は、どうなってしまうのだろうか。

そんな問題意識の下、大学教員である自分に何ができるか考えたとき、思いついたのが立教大学でのシンポジウムの開催です。幸い私の知人の中に、これら日本の問題に関して見識が高く著書などを通じ貴重なメッセージを発している人がいました。東京大学名誉教授の矢作直樹先生と、育生会横浜病院院長の長堀優先生です。偶然にもお二人ともお医者

様です。更に共通しているのは、お二人とも目に見えないものの存在を固く信じているという点です。医療現場は、高度な科学的論理性が求められる唯物論的世界であり、いわゆるスピリチュアルな世界とは最も遠い存在です。そのような世界に身を置きながら、お二人は勇敢にも霊の存在や輪廻の可能性などを前提に多くのメッセージを発信しています。実は私がお二人の先生と関わられたのも、自分の研究分野の一つでもある霊性（スピリチュアリティ）の問題に関してお二人が言及されていたからです。

ところで皆さん、霊性（スピリチュアリティ）とは一体何でしょう。靈魂の存在とか、生まれ変わりなどといったスピリチュアルな現象でしょうか。確かにそれらの現象は霊性を考える上での重要な要素の一つです。あるいは、悪霊とか靈感商法とか、そういうネガティブなイメージでしょうか。しかしそのようなネガティブな事象は、霊性の本質とはまったく無縁のものです。それらは、悪意をもった人間がスピリチュアルな現象を利用して作り出した人為的な解釈や行為に過ぎません。霊性の本来の意味は、万教同根であるはずの宗教がもつ共通要素、すなわち多くの宗教が説明している宇宙の成り立ち、超越的存在（神）との繋がり、生きる上での規範などの共通部分のエッセンスです。それと同時に、宗教が持つ負の側面、すなわち他の宗教を否定したり、独自の観念体系や教義を強要したり、と

いう拘束的な部分を取り除いたものです。従って靈性とは、人間が普遍的にもつ人間存在の意味や価値を問う行為や、人知を超えた大いなる存在を認識し、それに対し畏敬の念を抱くことなど、人間ならではの深遠な特質と捉えることが出来ます。悠久の時を超えて繰り返される大自然の営みに畏怖を覚え、樹木や動植物、更には山や川や風などにまである種の神性を感じ取る。そんな営みこそ、靈性の顕われと見ることが出来るのです。また自己を一体と捉え、個人の繁栄よりも全体の調和を重んじる精神も靈性がもたらすものでしょう。世界中の先住民族やかつての日本人は、この靈性に根差した生活をしてきたように思えます。さらに靈魂の存在や生まれ変わりとといったスピリチュアルな現象に関して言えば、世界中の多くの研究者が真摯な研究を重ね、それらの成果を見れば、状況証拠のレベルではありますが、これらの現象の存在はほぼ間違いないでしょうし、近年の量子力学の知見もかつての物心二元論の限界を見極め、人間の想念の力を科学的に裏付けるレベルまできています。

靈性に関する記述が長くなってしまいました。しかし本書で語るお二人の議論のベースには、この靈性に基づいた眼差しが一貫して流れています。従って本書の趣旨、議論を理解するうえで、靈性への眼差しは本質的に外せないと考え敢えてここに書かせてもらいま